

第1回 「弥生時代の富里」

～ 果敢な開拓者 ～ 2006・5・21
林田利之

1. 弥生時代の到来

数千年の間、狩猟・採集を生活の基盤とした縄文時代の人々に、およそ2,300年前に大陸から稲作の栽培技術や農具（石器・木器）、金属器（青銅・鉄）がもたらされ、それまでの暮らし方に大きな変化が訪れました。初期稲作農耕は北九州地方を中心として行われ、弥生時代前期中頃には日本海側を通過して東北地方にまで伝わり、各地で生業としての農耕が行われるようになりました。

弥生時代は前期・中期・後期の三時期に大別されており、中期になって南関東地方においても本格的な稲作農耕が開始されるようになります。当時の稲作農耕に関わる開墾・灌漑作業などには多くの人手が必要であったため集落は大きくなり、九州の吉野ヶ里遺跡などに代表される「環濠」と呼ばれる溝を巡らし、その中に集落を営むようにもなります。この「環濠」は一つの集落の範囲を示すとともに外敵の侵入を防ぐという目的があったものと考えられています。

印旛地域でも中期の後半には南関東地方からの入植者達の環濠集落がみられ、稲作が行われたと考えられています。

ただ、残念ながら印旛地域では水田面の調査が実施されていないため水田跡は発見されておらず、水稲耕作が行われていたという確かな証拠は発見されていません。



図1 千葉県内の主な弥生時代遺跡

時期区分・土器型式		土器の移り変わり
前期	I	荒海式
	II	（殿内式）
中期	IIIa	（須和田式） 出流原式
	IIIb	（池上式） 池上式
	IV	宮ノ台式
	Va	上総・安房
後期	Vb	下総

図2 弥生土器の移り変わり